

「座って見るために、画像を解除する」

1980年代生まれの日本人である自分にとって「世界は幻影に包まれている」と言っても過言ではない。大袈裟だろうか。写真は、現実を記述する役割を統計にとって変わられて以降、画像-イメージとしての戦略的な様相を強めた。決定的だったのは、湾岸戦争が全世界にブロードキャストされ、モニターの向こうに戦争を押し込め、"TV WAR"となったことだった。いまや政府だけでなくテロ組織もネットを介して、メディア操作を駆使して戦う。（震災を想起すれば）報道すらも何らかの息がかかっているとの疑念を払拭できない。FAKE NEWSやPOST TRUTHといった言葉が作られる以前から、私たちはそんな予兆を感じつつけてきたはずだ。もはや私たちには、どんな現実も指し示すことができないかのようである。あなたの椅子が安心して座れるものかどうか、甚だ怪しいのだ。

しかし、みずから世界を形成する回路が断たれているというわけではない。この目で見、この手で触れることのできる現実のみを信じる、この信仰を基本として精力的に世界を拡張することは可能だ。生の現場に立ち会おうする姿勢を、医師と戦士から、世界を発見的に知ろうとする姿勢を、ジャーナリストから学ぶべきである。私は芸術家らしく、メディア操作を批評的に扱いたいと思う。それが本展の存在領域であり、ステートメントである。

本展で扱うクソコラ(CRAPPY COLLAGE)は、ネット民が開発した高度なイメージ批評であり、上述のようなメディア状況を茶化すことで、我々のメディア状況そのもの自体をメタ化する行為である。メディア状況に批評を加えることこそが、最大に政治的な芸術家の営みであると、私は思う。絶えず別様な形へとメディアの隙間をひらくことをとおして、世界を再び形成するのである。

モチーフとして扱うのは、昨年おきたロシアの駐トルコ大使殺害事件である。アンドレイ・カルロフ氏は写真の展覧会場で演説中に後ろから撃たれた。ホワイトキューブで繰り広げられたこの暗殺劇を、私は看過することが出来ない。政治的デモンストレーションとしてメディアを濫用しようとする暴力に、同じメディアの地平で抵抗するために、私は本展を企図する。